

『豊饒の海』試論（1）：聡子の言葉『天人五衰』 から『春の雪』へ

稲田，大貴
九州大学大学院比較社会文化学府修士課程一年

<https://doi.org/10.15017/11041>

出版情報：九大日文．11，pp.70-80，2008-03-31．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

『豊饒の海』試論(1)

—— 聡子の言葉 『天人五衰』から『春の雪』へ ——

稲田 大貴

一 問題の所在

『豊饒の海』^①の第四巻『天人五衰』において、物語は意外とも言える形でその幕を下ろす。

第一巻『春の雪』以来、六十年ぶりに月修寺を訪れた本多繁邦は、今や門跡となつた綾倉聡子と再会する。本多は自らの親友であり、聡子の想い人であつた松枝清頭について語る。しかし聡子は「何一つ感慨のない平坦な口調で」、きつぱり清頭を知らない、と言うのである。この言葉に怒りすら覚えた本多は、聡子を必死に追及する。そんな本多を尻目に、聡子は「美しい声で」、やはり「松枝清頭さんといふ方は、お名をきいたこともありません」と繰り返し、「そんなお方は、もともとあらしやらなかつたのと違ひますか？」と言う。本多はそれを否定しながらも「雲霧の中をさまよふ心地」で、「それなら、勲もなかつたことになる。ジン・ジャンもなかつたことになる。……その上、ひよつとしたら、この私ですらも……」と叫ぶ。そして聡子はこう言うのである。

「それも心々ですさかい」(『天人五衰』第三十章)

そうして本多は、これまで自分が見てきたはずの世界を否定され、空無の表象としての「月の庭」へと導かれる。聡子の言葉によつて物語はカタストロフを迎えるのである。この清頭を知らないという聡子の言葉に、読者は一種の戸惑いのようなものを覚えることだろう。『豊饒の海』を『春の雪』から読んできた読者は清頭に始まり、次々と転生してきた、清頭の生まれ変わったりの物語を見てきた。転生の根幹部とも言える清頭と聡子の恋愛がなかつたとするのは、そのまま物語の消失へと直結する。そして読者には理由も意味も理解できないままに、まるで足場を踏み外したような感覚だけが残されるのである。

この『天人五衰』の結末部に関しては、先行研究によつて既に多くの解釈がなされている。それらは主に、あらゆる存在を空なるものとして認識することを根本思想とする唯識論によつて解釈したものである^②。しかしながら、近年では唯識論で解釈することの不可能性を指摘する論も散見される^③。小林康夫は「無の透視法——三島由紀夫『豊饒の海』について」(『無の透視法』所収一九八八年十二月 書肆風の薔薇)において結末部を「物語は法によつて否認される」と解釈しながらも、「『阿頼耶識』は、決して法の根拠となり得ない」と述べている。小林の論には、「法」の内実が不明ということからやや揺れがあるように見られるが、唯識論による結末部の解釈は否定されている。唯識論による解釈が成り立たないとすれば、聡子が清頭のことを

知らないと言った理由は何なのか、また聡子の言葉はどのように解釈されるのか、という問題が再び浮かび上がってくる。しかしこの問いを論じるためにはもう少し手順を踏まなければならぬ。聡子の言葉の理由、意味を論じる前に、月修寺を訪ねた本多に聡子が語った言葉それ自体の分析を行う必要があると思われる。聡子の言葉をより正確に把握し、その上で理由、意味を論じなければ、誤読を招きかねない。よって本稿ではまず聡子の言葉そのものの分析を行い、それが内包する問題点を表出させることから始めたい。その上で、月修寺門跡の聡子と『春の雪』の聡子が「同一」なのかという問題を論じると共に、聡子が清頭を知らないと言ったことで否定された物語の端緒を明らかにする。それらを踏まえ、聡子の言葉が孕む矛盾点の正確な座標を提示することが本稿の目的である。

二 聡子の言葉

老いたわが身に鞭打つように、本多は月修寺を訪れた。そして六十年前に清頭の代理として訪れたときと同じ部屋で、本多は聡子と再会するのである。聡子は本多に対し、「朗らかな声で」「ようこそ」と声を掛ける。聡子のこの第一声から、すでに敏感な読者は違和感を覚えることだろう。本多は聡子との再会に涙を流さんばかりに感動している。聡子が、本多に対してそこまでの思い入れはないにしても、多少は懐古の情が出てもいいはずである。また本多が聡子に対し「お懐かしうございま

す」と言っているのに対して、聡子は本多との面会の理由として「あまり御熱心やさかい」と述べる。ここには二人の認識のずれを明確に読み取ることができる。

しかしこのやり取りには、まだ重要な問題が含まれている。後に清頭を知らないと言い、本多のことも知らないはずの聡子は、本多の「お懐かしうございます」という言葉に対して、疑問を抱くようなそぶりを一切見せないのである。自分が知らないはずの人間から「懐かしい」と言われれば、不思議に思うのが当然の反応であろう。しかし聡子は「かすかに揺れるやうに笑った」だけである。このことには三つの可能性がある。一つは、単純に受け流したという可能性。二つ目は、聡子は清頭のこと、本多のことも覚えており、初めからそのことに関して嘘をつく気であったという可能性であり、三つ目は、聡子自身、本多のことを知らないが、自分が忘れているかもしれないと思っているという可能性である。一つ目の可能性を採るならば、このやり取りは何ら問題とはならない。しかし二つ目、三つ目の可能性の場合、その読みによる解釈は大きく異なることになる。しかしいづれにしても、このやり取りだけで決定することはできない。もう少し、先のやり取りに目を向けてみたい。

本多は月修寺門跡となった聡子に対し、これまでの遠慮を捨てて、清頭の名を口にする。しかし聡子はこう言うのである。

「その松枝清頭さんといふ方は、どういふお方でした？」

この言葉によつて、読者の違和感ほほば確実なものとなる。聡子が清頭を知らないということは、あまりに「理を外れている」。当然、本多もそう考えて聞きなおすが、聡子は同じ台詞を繰り返すだけである。本多は、聡子が清頭について語らせようとしていると察するが、ここで前の問題に戻りたい。聡子が始めから嘘をつくつもりでいたとすれば、この時点で清頭のことを知らないということもできたはずである。しかしここでは、聡子は清頭について尋ねており、この言葉は聡子自身が忘れている可能性を考慮したための言葉ではないだろうか。そして、そのときの聡子の態度は「いささかの術ひも韜晦もなく、むしろ童女のやうなあどけない好奇心さへ窺はれて、静かな微笑がそこに絶え間なく流れてゐる」やうなものであつた。本多に内的焦点化した語り手による、聡子の描写をそのままに信用するわけにはいかないが、少なくとも本多の目には聡子が嘘をつくやうな態度には見えていなかったということだけは明らかである。そして、本多が語る清頭と聡子の恋の話を聞き終わった聡子は、決定的な言葉を口にするのである。

「えらう面白いお話やすけど、松枝さんといふ方は、存じませんな。その松枝さんのお相手のお方さんは、何やらお人違ひでつしやろ」『天人五衰』第三十章

ここに來て聡子は、ようやく清頭のことを知らないと説明する。それは本多が清頭と聡子の恋の物語を語つた後のことである。

聡子は本多が自明のこととして扱つてきた清頭の存在を自分が知らないということを説明するのをここまで遅らせている。本多は月修寺を訪れる前に、聡子に宛てて手紙を書いているが、そこに清頭のことを書いているであらうことは推測に難くない。また訪問の後も、前に見たやうに清頭の名を出している。聡子が清頭を知らないということができる場面は幾度かあつたにも拘らず、本多が清頭の思い出を語るまで、その言明は遅らされているのである。このことはもつと注意されてよい。その時間は聡子が自分自身の記憶を確認するために必要とされた時間だつたのではないだろうか。無論、聡子が初めから嘘をつくつもりでいたという可能性も否定はできない。しかし聡子自身の記憶への疑いを持つていふという可能性は裏返せば、これまでの唯識論による解釈や、聡子を「神秘的」な存在と捉える解釈を否定する可能性でもある。これらの解釈を成立させるためには、本多との面会での聡子の態度が一貫しているという前提がなければならぬ。しかし聡子が自身の記憶に疑いを持つていふと解釈した場合、これらの解釈は根拠を失ふこととなるのである。

そしてこの時点において、聡子は決して清頭の存在を否定しているわけではないということにも留意しておきたい。聡子自身は清頭を知らない。だから清頭の恋の相手は別人だと主張している。ここからは本多に記憶の無効を語る意志などは読み取れない。ただ、本多の記憶との違いを言つていただけである。しかし本多の知る『春の雪』で清頭と大恋愛を繰り広げた聡子

が、清頭のことを知らないはずはない。本多は「しかし御門跡は、もと綾倉聡子さんと仰言いましたでせう」と尋ねるが、聡子は「はい、俗名はさう申しました」と答える。本多にも、読者にも「綾倉聡子」という人物は『春の雪』における聡子しか与えられておらず、月修寺門跡となつた聡子と、『春の雪』の聡子が同一人物でないとする選択肢はないように思われる。しかしこの二人を「同一」でないと捉えることは、あまりにも飛躍しすぎた解釈なのだろうか。このことに關しては後述したい。

清頭を知らないと答えた聡子に対し、本多は怒りにかられ、「則を超えた追究」をする。しかし聡子は「声も目色も少しも乱れずに、なだらかに美しい声で」こう言うのである。

「いいえ、本多さん、私は俗世で受けた恩愛は何一つ忘れはしません。しかし松枝清頭さんといふ方は、お名をきいたこともありません。そんなお方は、もともとあらしやらなかつたのと違ひますか？ 何やら本多さんが、あるやうに思うてあらしやつて、実ははじめから、どこにもをられなんだ、といふことではありませんか？ お話を伺つてゐますとな、どうもそのやうに思はれてなりません」『天人五衰』第三十章

本多の「則を超えた追究」の詳細は明らかではない。しかし聡子の応答を見ると、「俗世のことは何もかも忘れたとおっしゃるのですか」というようなことを言つたのではないかと推測さ

れる。それに対して、聡子は「俗世で受けた恩愛は忘れ」ていないと言う。對馬⁴が指摘するように、あらゆる存在を空なるものとして認識する唯識論によつて解釈するためには、「俗世で受けた恩愛」も空なるものでなくてはならない。清頭のことだけが欠落している以上、唯識論による解釈は成り立たない。しかしここでは「俗世で受けた恩愛」の内実は一切語られておらず、『春の雪』における聡子と結びつける情報は何も与えられていない。よつて月修寺門跡の聡子が本当に清頭を知らないという可能性は留保されることになるのである。

また聡子は、ここから清頭の存在そのものを否定する推論を語り始める。「そんなお方は、もともとあらしやらなかつたのと違ひますか？ 何やら本多さんが、あるやうに思うてあらしやつて、実ははじめから、どこにもをられなんだ、といふことではありませんか？」という言葉は唯識論に基づいていると解釈されるが、先に述べたように、聡子自身の世界認識は唯識論に拠つていない。聡子は自己矛盾を孕みながらも唯識による論理を本多に語つているのである。しかしその矛盾は看過され、松枝清頭という存在は「それも心々ですさかい」という言葉に表されるように、唯識の中に溶かし込まれてゆく。本多が「何もない」「月の庭」に導かれるのは、その後のことである。清頭の存在を否定することは、本多がこれまで見てきた世界を否定することである。では本多の見てきた世界とは何なのだろうか。松枝清頭という存在は一体、何なのだろうか。この問題は、後章で詳しく論じたい。

ところで聡子は清頭を知らないと言った。しかしそれは忘れたのであろうか、それとも嘘をついているのか、あるいは元々知らないのか。聡子自身、完全に忘れており、全く思い出せないとするれば、それまでのことである。しかし前に見てきたように、聡子は思い出すきっかけを多数与えられており、また自身が出家する原因となった清頭をそこまで完全に忘れ去ることができのだろうか。記憶喪失、或いは記憶の書き換えがなされているとしても、本多によつて突き付けられた清頭の内容をこうまできつぱりと知らないと言いつけるものではないように思われる。では嘘をついているのか。本多は「清頭のことを知らぬと言ひ張るだけの事情があること」を察している。その「事情」とは、聡子が洞院宮との婚約破棄という出来事に不敬の念を抱いているであろうことと考えられる。しかしそれならば、本多との面会を断るという選択も聡子ではきたのだから、会わねばよいだけである。本多と面会する以上、清頭のことを話さざるを得ない。つまり、聡子が嘘をつく理由は聡子の側ではなく、本多の側になければならない。しかしその理由は見当たらぬ。もちろん理由なき嘘ということもあるだろう。しかし前述したように、初めから嘘をつく意図があるとすれば、本多に清頭のことを語らせる必然性はない。では元々、清頭のことを知らないという可能性はどうだろうか。清頭のことを知らないということはここまで論じてきた月修寺門跡の聡子と、『春の雪』の聡子が「同一」であるという前提を揺るがすことになる。しかし読者には本多の視点と「もと綾倉聡子」という名前

のみしか、判断材料は与えられていないのである。ここで最終巻『天人五衰』の結末部から、『春の雪』へと戻り、『春の雪』の聡子を再度、検証する必要があるだろう。

三 『春の雪』における聡子

月修寺門跡の聡子と、『春の雪』の聡子が「同一」なのかという問題の領域は広範囲に渡る。まずはこの二人が同一人物なのかということだが、前述したように「綾倉聡子」という人物はテクスト上において、一人しか与えられていない。門跡が本多に「しかし御門跡は、もと綾倉聡子さんと仰言いましたでせう」と問われ、肯定している以上、「綾倉聡子」であることを否定はできず、テクスト外部の存在でもない以上、月修寺門跡の聡子と、『春の雪』の聡子は同一人物であると言えるだろう。しかし同一人物であることは、「同一」であることと直結しない。同一人物ではあるが、というよりも同一人物であるが故に、この二つの存在の間には何かしらの差異、或いは断絶があるのではないだろうか。『春の雪』における聡子を、物語言説におけるレベルから、〈語り〉に着目し、語られる存在として分析することでそれを明らかにしたい。

まずは『春の雪』において初めて聡子が登場する場面の描写をいくつか見てみたい。

数本の竜胆を摘み終へた聡子は、急激に立上つて、あら

ぬ方を見ながら従つて来る清頭の前に立ちふさがつた。そこで清頭には、ついぞ敢て見なかつた聡子の形のよい鼻と、美しい大きな目が、近すぎる距離に、幻のやうにおぼろげに浮かんだ。(『春の雪』 第三章)

清頭は鋭い目で聡子を見た。いつもこれだ。これが彼をして聡子を憎ませるものになるのだ。急に、いはれもなく、性の知れない不安を呉れること。彼の心の中には、抗しがたく一滴の墨がみるみるひろがり、水は一樣に灰鼠に染められてゆく。

聡子の憂ひを帯びてはりつめた目は、快さに慄へていた。

(『春の雪』 第三章)

これらの描写では聡子の目について多く語られていることが注意を引くが、ここでは聡子を描写するときの語り手の位置にこそ着目したい。聡子の描写は清頭を視点人物とした語りがなされている。この後も清頭と聡子が二人になる場面において視点人物に設定されているのは清頭であり、語り手が聡子に内的焦点化することは殆どない。このことについては既に有元伸子が指摘している通りである。⁵⁾しかし、清頭のいない場所での聡子はどのように語られているのか。清頭が登場せず、聡子が登場する場面は、洞院宮家の茶会、清頭の逢瀬の後の本多との車中、芸妓との麻雀の稽古、蓼科との妊娠を巡るやり取り、墮胎のため向かう大阪への道程、そして月修寺での剃髪の間面であ

る。この内、麻雀の稽古、妊娠を巡るやり取りでは主に蓼科に、大阪への道程では綾倉伯爵夫人に内的焦点化されている。しかし洞院宮家の茶会、本多との車中、月修寺での剃髪の三つの場面において語り手は聡子に内的焦点化し、語っているのである。これらの場面を順に、考察していきたい。始めに洞院宮家の茶会の場面を見てみたい。

五月に入つたある日、聡子は洞院宮御別邸へ、お茶の時間のお招きをうけた。例年ならば松枝家のお宮様の祭への案内が、既に来てゐる筈の日頃であるのに、今聡子が何より心待ちにしてゐるその案内は来ず、代りに宮家の事務官が招待状を携へて来て、さりげなく家扶に渡して去つた。(『春の雪』 第二十二章)

聡子は母のこんなまぢがひに興ずるでもなく、静かに笑つてみせただけであつた。今日に限つて自分の顔が念入りに注意され、羽二重の引出物のやうに検められるのがいやだつたのである。

髪の乱れを厭うて、窓も閉め切つてゐるために、馬車の中は炉のやうな暑さだつた。たえまない動揺、周囲につづく田植前の水田に映る若葉の山々、……聡子は自分が未来に待ちこがれてゐるものが、何だかわからなくなつてゐた。一方では、奇体なほど放胆に、のがれやうもないところへ自分を流し込んでゆくところの、危険な心はやりにとらは

れてゐて、一方ではまだ何事かを待つてゐる。今ならまだ間に合ふ。まだ間に合ふ。あはやといふ時に赦免状が届くことに望みをかけ、一方ではあらゆる希望を憎んでゐた。

『春の雪』 第二十二章)

仰言ると間もなく、御玄闕のはうでざわめきがして、王子の御帰邸の気配が伝はつてきた。

治典王殿下は佩刀を鳴らし、軍靴を鳴らして、その勇ましい軍服のお姿を廊に現はし、父宮に拳手の礼をなされた。聡子はその一瞬、いひしれぬ空疎な威風を感じたけれども、父宮がさういふ王子の勇武をお好みのことは明白であつたし、若宮も何かにつけて父宮のお望みどほりに身を処して來られたことがよくわかつた。(『春の雪』 第二十二章)

この描写からは一見して、聡子の清頭への思いと、治典王との婚姻話に乗り気でない心情が読み取れる。しかし着目すべきはそこではない。一つ目の引用を見ると、語り手は物語内の現在時間において聡子に内的焦点化し、語つてゐることがわかる。

『春の雪』において、語り手が最も多く内的焦点化するのは清頭であり、物語内部の時間は清頭の時間と一致している。『豊饒の海』四部作では、本多の時間と共に物語は進んでゆくが、『春の雪』では本多の時間は清頭のそれと一致している。この時点においては聡子の時間も清頭、本多の時間とのずれはない。次に語り手が、聡子に内的焦点化するのには、本多との車中であ

る。この場面では基本的に本多に内的焦点化している。しかし次の箇所からは急に聡子に内的焦点化されている。

語りながら聡子は、そのたびごとに最後の逢瀬のやうに思われる清頭とのあひびきが、殊に今夜は、清寧な自然に囲まれて、どんなに怖ろしい、目のくらむほどの高みに達したかを、つつしみのなさをも犯して、語り残したくたらない気持が、どうして本多にわかつてもらへる。だらうかと焦つてゐた。それは、死とか、宝石の輝きとか、夕日の美しさとかを、人に語り伝えることの至難に似てゐた。

『春の雪』 第三十四章)

ここから語り手は聡子に内的焦点化し、終南別業での清頭との逢瀬を語る。このとき、清頭との逢瀬は既に終わつたことであり、物語内時間からは過去に遡つた形で語られている。つまり物語内部における聡子の時間は、清頭、本多のそれから、語り手によつてずらされているのである。最後の、聡子に内的焦点化する月修寺での剃髪の場面も同様である。しかし本多との車中の回想は、多く見積もつても一、二時間程度前の出来事の回想だが、こちらは明らかにそれよりも長い時間を遡つてゐる。その後、綾倉伯爵との会話を最後に聡子は六十年後の『天人五衰』の結末部まで物語から姿を消すのである。

語り手による『春の雪』という物語言説における時間は清頭、本多の時間を軸として展開してゆく。しかし聡子の時間は徐々

にそれからずらされている。このことは聡子が物語内部における清頭、本多の時間と、それとは異なる未知の時間の、二重の時間による存在していることである。そして清頭、本多の時間による物語から追い出された聡子は物語言語における、語られない空白の領域へと追いやられる。このとき、聡子の時間の二重性は解消されるのである。言い換えれば、『春の雪』の聡子は清頭が存在する時間軸によつて構成される世界と、存在しない時間軸の世界とに二重に存在していたのである。しかし清頭、本多の時間軸によつて構成される物語からはじき出されることで、聡子の時間は語られない、隠された物語の時間に回収される。つまり六十年後、再び現れた聡子の時間は本多のそれとは全く別のものであると考えられる。その意味において、『春の雪』の聡子と月修寺門跡の聡子とは、物語内部における存在の時系列が異なっているのではないだろうか。

四 書かれた夢と書かれなかつた夢

さて一度、聡子の言葉に戻つておきたい。聡子は清頭を知らないと言ひ、その存在を否定する推論を語つた。先に述べたように、清頭の存在を否定することは、本多のこれまで見てきた世界を否定することと同義である。本章では聡子の言葉によつて否定された本多の見てきた世界とは何かという問いに答えるために、松枝清頭という存在は一体何か、という問題について、夢日記を通して論じてゆく。

清頭の夢には、夢日記に書かれたものと書かれなかつたものがあると考えられる。『春の雪』には書かれた夢が三ヶ所あり、これらは夢日記に書かれたことが言明されている。しかし残り四ヶ所の清頭の夢の描写には、夢日記に記したか否かの言明がない。いくつかは記していないことを思わせる記述があるが、やはり言明はされていない。記したことが言明されていない以上、それらの夢は書かれなかつたと考えの方が自然と思われる。夢日記に書かれた夢は、勲とジン・ジャンへの転生によつてその内容が実現されたことを考えれば、これが転生の筋書きであると推測することは容易い。だが、『春の雪』において、初めに夢日記に記された夢はやや趣が異なる。

……昨夜は昨夜で、彼は夢のなかで自分の白木の柩を見た。それが窓のひろい、何も無い部屋の只中に据ゑてある。窓の外は紫紺の暁闇、小鳥の囀りがその闇いつばいに立ちこめてゐる。一人の若い女が黒い長い髪を垂らして、うつぶせの姿勢で柩に縋りついて、細いなよやかな肩で歎希してゐる。女の顔を見たいと思ふけれど、豹の斑紋の飛んだひろい毛皮の、沢山の真珠の縁飾りのあるのが、半ば覆うてゐる。夜あけの最初の透明な光沢が、その真珠の一行にこもつている。部屋には香の代りに、熟れ切つた果実のやうな西洋の香水の匂ひが漂つてゐる。

清頭はいへば、中空からそれを見下ろし、柩の中に自分の亡骸が横たはつてゐることを確信してゐる。確信して

はるけれど、どうしてもそれを見て確かめてみたいと思ふ。しかし彼の存在は朝の蚊のやうにはかなげに中空に羽を休めるばかりで、決してその釘附けられた柩の中を窺ふことはできない。(『春の雪』第二章)

この「若い女」は顔が見えない。しかしその装い、香りは清頭が幼時、お裾持を務めた際の春日宮妃のものと同じ。これは優雅の隠喩であると推測され、清頭が優雅のうちに死んだことを考慮すれば、これもまた一種の予言である。つまり夢日記は、現実における未来を示唆する予言であり、また現実に先行する「事実」とも言える。

では書かれなかつた夢はどうだろうか。その内のいくつかを見ておきたい。

清頭は夢を見た。夢のなかで、この夢は日記に誌すことはとてもできない、と考へてゐる。それほどこみ入つて、それほど錯然としてゐるのである。

さまざまな人物があらはれる。雪の三聯隊の営庭があらはれるかと思へば、そこでは本多が将校になつてゐる。雪の上をふいに孔雀の群が舞ひ下りるかと思へば、シャムの王子が左右から聡子の頭に、長い璽路を垂らした黄金の冠を戴かせてゐる。飯沼と蓼科が口争ひをしてゐるかと思へば、一人がもつれあつて千仞の谷底へころがり落ちてゐる。みねが馬車に乗つてきて、侯爵夫妻が恭しく出迎へてゐる。

さうかと思ふと、清頭自身は、筏に揺られて、はてしれぬ大洋を漂流してゐるのである。

夢の中で清頭は思つてゐた。あまり深く夢にかかづらうのために、夢が現実の領域にまで溢れ出し、夢の氾濫が起つてしまつたのだ。(『春の雪』第二十一章)

するうちに聡子は夢と現の堺に、突然、ありありと姿を現するやうになつた。もはや清頭の夢は、夢日記に誌すやうな客観的な物語を編むことがなくなつた。ただ願望と絶望が交互に来て、夢と現実が互いに打消し合ひ、あたかも海の波打際のやうに定めぬ線を描いてゐるが、その滑らかな砂上を退く水の水鏡に、突然、聡子の顔が映るのであつた。これほど美しくこれほど悲しげな面影はなかつた。

夕星のやうにけだかく煌めく顔は、清頭が唇を寄せるとたちまち消えた。(『春の雪』第五十一章)

これら書かれなかつた夢は『豊饒の海』を通して実現されることとはなく、その意味では夢の領域に留まつてゐる。一つ目の引用では、夢を見ている清頭の立場は、始めは夢を夢と認識しており、夢の世界に立脚している。しかし末尾においては夢の世界であるにも拘らず、それを現実と認識してゐるのである。ここには清頭の夢と現実の世界の境界がゆらいでいることが読み取れる。二つ目の引用では更に、夢と現実のゆらぎが顕著に見られる。清頭の夢は客観性を喪失し、夢と現実の境界線は激し

くゆらいでいる。ここにおいてはもはやその描写が、夢なのか現実なのかの判断さえできない。これらの書かれなかつた夢において、清頭は客観性を喪失し、夢に溶かし込まれていつているかのようである。その意味において、清頭は夢の世界に引きずり込まれているとも言えるだろう。一方で清頭は、夢日記に書かれた夢では客観性を有し、外部の視点を持っている。そのとき、夢は清頭を外在化していると言える。しかし夢日記は書かれたものであり、清頭が見た夢そのものではあり得ず、清頭の夢の代補である。つまり、書かれることによつて夢そのものを代理するとともに、清頭の視点を補足したものである。よつて夢日記はエクリチュールであるが故に清頭という存在を内在化していると言えるだろう。

そしてその夢日記は本多へと渡される。松枝清頭という存在を内包した夢日記は第二巻『奔馬』以降、清頭の生まれ変わりが次々と現れることで、本多の眼前において現実のものとなる。つまり夢日記は夢が現実となり、現実が夢に回収されるという、夢と現実の物語の原動力となるのである。月修寺門跡となつた聡子に否定され、空無化された本多の世界とは、夢と現実の狭間で織り成される物語に他ならない。

五 まとめと今後の展望

『豊饒の海』四部作を通読してきた読者が、結末部においては足場を踏み外したような、一種の戸惑いを覚えるだろうことは

論の冒頭に述べた。この感覚は、清頭を知らないと言つた聡子の言葉が孕んでいる矛盾に端を発している。しかし聡子が清頭を知らないことが矛盾なのだろうか。確かに、聡子の言葉が本多の時間によつて貫かれた、夢と現実の狭間で織り成される物語の内部に持ち込まれたとき、聡子の言葉は「理を外れ」たものであり、矛盾を孕んだものであると言える。だが、語り手によつて物語内時間から徐々にはあるが追放され、語られない空白の領域へと飛び込み、本多の時間で六十年の間、沈黙していた聡子のいる場所において、清頭を知らないということは矛盾してはいなかつたのではないか。清頭は夢日記を書き、その存在は夢と現実の狭間で織り成される物語に溶かし込まれ、その原点となつている。しかしその物語の中に聡子はいなかつた。そう考えれば清頭を知らないという聡子の言葉はただ、至極当然のことを言つたに過ぎないのである。

では聡子は何処にいて、その言葉は何処から発せられたのか。小林は「歴史と無の円環―三島由紀夫『豊饒の海』」（『出来事としての文学』所収一九九五年四月作品社）で次のように述べている。

なによりもそこで決定的な一撃が、『外』から、月修寺という物語のなかの『外部』、そのクリプトから——いや、そのさらに『外』でもあるその庭、いかなる記憶も出来事も不可能であるようなその庭から——もたらされる瞬間まで待たなければならぬのだ。

聡子の言葉は、小林が述べるように「物語のなかの《外部》」から発せられたものだろうか。小林の言う「物語」の内実は不明だが、筆者も聡子の言葉は夢と現実の狭間で織り成される物語の外から発せられたと考える。しかし月修寺も聡子も、その物語に招請され、物語内にもまた事実である。このことから、聡子の言葉の孕んでいる矛盾の原因は聡子の言葉が発せられた場所が、物語内でもあり、物語の外でもあるという、パラドキシカルな場所であるということに端を発していると考えられる。では、物語内であり、物語の外でもある、聡子のいる場所とは一体何処なのだろうか。それを論じるためには、聡子の言葉によって否定された本多の見てきた世界、つまり夢と現実の狭間で織り成される物語を詳細に分析し、それに回収されない箇所を浮かび上がらせることが必要と思われる。このことを次稿の問題として提起し、本稿を終える。

【注記】

1 初出は第一巻『春の雪』、「新潮」一九六五年九月号—一九六七年一月号。第二巻『奔馬』、「新潮」一九六七年二月号—一九六八年八月号。第三巻『暁の寺』、「新潮」一九六八年九月号—一九七〇年四月号。第四巻『天人五衰』、「新潮」一九七〇年七月号—一九七一年一月号。

2 結末部を唯識論によって解釈した論として、高田一樹「三島由紀夫『豊饒の海』ウロボロスの偏在（下）」（『繻』一九九三年十二月）、有元伸子「『豊饒の海』における沈黙の六十年」（『日本近代文学』一九九五年十月）などがある。

3 他にも對馬勝淑は、『豊饒の海』論（一九八八年一月海風社）で聡子の言葉の詳細な分析を行い、唯識論で解釈することによって生じる矛盾点を指摘し、「まったく偽りの発言」あるいは「部分的記憶喪失」と論じる。それを受け、大石加奈子は『天人五衰』研究—結末の謎 クロ—ズアップの盲点（『阪神近代文学研究』二〇〇〇年七月）において聡子を、對馬が矛盾と断じた「同一—自己が非実在であると同時に実在でもある」、「神秘的な存在」と仮定し、論証している。

4 【注記3】参照

5 有元は「綾倉聡子とは何ものか—『春の雪』における女の時間」（『金城学院大学論集』一九九四年四月）の中で、「テキストの語り手は、本多や清頭によりそっており、全体に、聡子に内的焦点化されることが少ない」と述べている。

6 小林は「無の透視法—三島由紀夫『豊饒の海』について」の中で、「転生の論理は二種類の証しによって支えられている。ひとつは夢であり、後の生の情景を夢見ることである（逆の例は物語られてはいない）。もうひとつは肉体に刻まれた特異な表徴、すなわち左の脇腹の小さな三つの黒子である。」と述べているが、「少なくとも、物語が語っている限りでの阿頼耶識と種子熏習の理論は、論理的には夢の証しと肉体の証しを必然化させはしない」と論じる。しかし夢日記が唯識論による必然か、単なる偶然に関わりなく、その筋骨きとなっていることは否定されない。

※ テキストは『決定版 三島由紀夫全集13』、『決定版 三島由紀夫全集14』（二〇〇一年十二月、二〇〇二年一月新潮社）に拠る。なおルビ、傍点は省略した。

（九州大学大学院比較社会文化学府修士課程一年）